―洋書紹介―

子供の教育

― Childhood Education ―

Journal of the Association for Childhood Education

十二月号（一九六七年）

この号は「教えることは成長することである」と題する故ローラ・ジルベスの追悼特集であり、併せて指導および教師の問題を扱っている。故ローラ・ジルベスは、オハイオ州立大学名誉教授で、A・C・Eの第三代編集長をつとめたこともあり、「子供の教育」誌だけで合計三〇の論文を寄稿している。講演、レコード、論文、著作、研究を通して、女史はアメリカの幼児教育界に貢献した著名な人物であった。

リーランド、ジャコブ（コロンビア大学教育学部教授）は、「ローラ・ジルベスに捧げる」巻頭文の中で、女史の人柄について次のように述べている。女史は、思想家としても、研究者としても、教育改革者としてもあるいは指導者としてもスケールの大きな人物であった。現代社会について、カリキュラムについて、子どもについて新しい見方と洞察とを加えたが、それらは常に教育の現場から発見し考え直し再構成したものであったし、たとえ問題は小さくても徹底的に究明し、改善し、そして調査をつづけた。

また、彼女の辞書には〝妥協〟という言葉はなく、勇気をもって役所に提言し、教師の自由を守り、アメリカのすべての子どもたちにより良い教育環境を与えるためにつくした。そして彼女の積極的な考え方、ダイナミックな思考は、多くの教師に影響を与え、今日もなお生きつづけていると述べている。

「創造的指導とは何か」（一九五六年十月号より転載）と「経験すること・協力すること・成長すること」の二つの論文は、ローラ女史の教師像を伝えるものである。少し長くなるが次に紹介してみよう。

創造的な指導とは、ある特定の定義のわく内で考えるべきものではなく、行動の因果関係や具体的な事例をさらに発展させて初めて意味をもつものであり、もう一度やってみて、さらに内容を豊富にし再構成することによりその意義を深め

るものなのである。したがって、パンの定義はできても、その一片のパンが二年生のためのすばらしい指導をもたらすとは誰も予測できない。そこにはこんな例が引用されている。

ある日のお弁当の時間に、一人の子どもが「ママの焼くパンは、こんなものじゃないよ」といった。この言葉に端を発して、パンの比較や話し合いが始まり、その内に農場見学に行くことになり、さらに製粉工場まで出かけた。工場見学のあと、農場からもってきた小麦を自分たちで脱穀しそれを挽いて粉にし、マッフィンを作ることになった。マッフィン作りから、さらに話は小麦粉で作るもの、あるいは他の粉で作るパンやパンの種類、はては他の国の食物にまで発展し、最後にパン屋の見学の後、父兄の一人からパンの作り方を教えてもらって、パンを作るに至るのである。そしてこのような創造的な学習の機会を与えてくれたパンに対し子どもたちは心から感謝するのであった。

創造的な指導とは、このように生活と関係のある学習の機会、理解の機会を発展させることであると女史は指摘している。そのためには、教師も自らの創造的可能性を満たすことに積極的でなければならないと述べている。教師は、子どもに内在する好奇心や自発性、創造性を養うのであるが、このような子どもの資質を伸ばすことが、実は創造的な経験なのである。終りに、指導の中に創造的要素を加えるための提案をいくつか示している。

◉経験からも本を見てもとけない問題がでてきたら、二つ三つ実験的にやってみて「なすことによって学ぶ」ことである。◉実践の中から型にはまった指導例をいくつか見つけ出し、より柔軟性のある指導やきまりきったやり方ではない指導を対比させてみる。◉くふうの積み重ねがややマンネリ化してきたら、創造的な可能性の前に心を開くことである。◉新しい状況にいどみ、仕事に変化をつけて、創造的な向上心を抑制し固定する、自己満足や新しい考えに対する反抗を捨てるようにする。◉協同作業に子どもを参加させることにより、先生のおしつけた方向から子どもを解放する。

二番目の論文では、ローラ女史が長い教師生活を通して、常に創造的な教師として成長できたのは、経験から良い指導と悪い指導とを比較して、自らの指導法を改良するヒントをつかんだことと、さまざまな関心をもつ人たちと協同研究等を通して接したことによると述べている。

ローズマリー・ヒルマン（教師兼指導主事）の「子どもの世界の教師」では、未来に生きる子どもたちの教師としてどんな役割をとるべきか論じている。教師

の役割とは、現在の子どもの要求を統合することだけでなく、将来に備えて最善のものを用意することであると定義している。

しかし教師は、将来のことに関して驚くほど何も知らない。たとえば、十年ごとに知識の量は二倍になるといわれているが、もしこの通りなら子どもは十年ごとに現在保持している二倍の量の知識を知ることになる。しかも、私たちの知識は、子どもに教える前にほとんど陳腐なものになってしまうのである。

知識の大波にさらされている私たちは、未知の世界に向かう子どもたちに何を用意してあげられるのか？　その答は勇気であり、誠実であり、困難や危険な事柄にぶつかっていく特別の力をさすあらゆる言葉であるとロ氏は答える。今日の教師は、学習をすすめていくための動機づけとして、勇気よりは恐怖の方を選んで子どもたちに与えている。

教師が、たえず「よろしい」「いけません」を連発して子どもの行動を審判し評価するために、子どもたちは安定した自己像を描けないでいると述べている。教師がこうしたおしつけがましい恐怖を教室内からとり去る勇気を持った時初めて、教師は子どもが自分の世界によろこんで向かって行けるような役割をとることができると指摘している。

私たちは、人生のどこかで、自分を心から信頼して、そしていつも受け入れてくれる人に一人位は出会うものである。そういう人のおかげで、恐怖から解放され胸をはって進んでいく勇気を持つのである。教師にもしこのような経験があり、それが学習の強力な鍵であることを知ったら、これと似た鍵を子どもたちにも与えようではないかとロ氏は主張している。終りに、教師は、子どもにとってどんな人間でなければならないか、次のように述べている。「私たちは、子どもを励ます人であり、浄める人であり、夢みる人であり、刺激を与える人であり、注意を促す人であり、保護する人であり、援助する人であり、そして子どもを尊敬する人である」と。

アルバート・ロウの「教師になる」という論文では、教師養成を改善するための四つの方向をあげ、検討を加えている。

一、直接経験を拡大して子どもの理解を深める時間を多くすること。

二、教師養成に関する公立学校(実習園)の役割は重要である。大学と学校、さらに研究所と文部省が教員養成に協力して当たること。

三、実習指導の課程を確立すること。

四、指導の研究（たとえば教師のふるまい方と子どもへの影響等）を通して指導効果をあげる知的な方策をとること。

（大戸）